

新潟県新潟市東区。JR新潟駅から車で約20分。新潟空港にも近い、国道沿いの工房『9Hearts a.I.C.』は製作されている。日本海はすぐそば、風が強い。「以前住んでいた仙台と比べれば、静かな街です」と、菱沼代表は語る。かつてはビリヤード場として使われていたという建物の広さは約120坪。工房内は、製作室、スプレース、木材保管庫だけでなく、事務室、ポケット台とスリークッション台が置かれた試撞室まである。「木材ストックや事務所スペースを贅沢にとっていますので、丁度良い広さですね」



菱沼代表に加え、製作に携わるのは菱沼浩之と渡辺貴史。2人とも菱沼代表の娘婿で、義理の兄弟にあたる。しかも2人の妻は、カスタムキューメーカー、『アイ・ラブ・キューズ』のスタートアップとして、数多くの逸品を扱ってきた経験を持つ。家族の会話に、キューの話題がごく自然に混じる、明るく楽しい工房だ。

「失敗を承知で、あえて試してみたい」とありますと語る菱沼浩之(右)、渡辺貴史(左)。若二人には毎日の経験手が財産となる。



新しいカタチのジャパニーズカスタム
【前編】

9Heartsが切り拓く新境地

2017年デビューの純国産キューメーカー9Hearts(ナインハーツ)、Luckyこと菱沼蔵氏が製作する超高級カスタムI.L.C.。家族経営の同じ工房で製作される両ブランドの違いは、何だろうか？ 共通する「日本製」への強いこだわりと、異なるコンセプトで製作されるキューの魅力を一気に渡って探ってみよう。前編は9Heartsを紹介！

取材・文/K.Kagomiya

9Hearts

Traditional but in novative

及びもつかないレベルですよ」と3人は揃って笑う。

さらに驚かされるのは、膨大な木材のストック。建物内のあらゆるスペースに、世界各地から取り寄せた多彩な銘木が保管されている。銘木は、買い付けて、すぐ使えるものではない。環境に馴染ませ、少し削っては寝かせるプロセスを数年間繰り返す必要がある。木材がキューになるまでの流れを途切れさせないよう、十分なストックが必要なのだが、大手量産メーカーを除けば、ここまでの種類と量を保有していることは稀だ。

「銘木は年々値上がりしているだけでなく、原産国が輸出規制したり、世界的に取引ルールが厳しくなったりして、調達に困難になっています。ですから、買えるうちに買って置こうと思います」(菱沼代表)

大量の銘木は、将来を見据えた投資でもあるのだ。

比類なき経験と若き才能の融合

9Heartsは1982年生まれの菱沼浩之、1990年生まれの渡辺貴史の2人が製作するブランド。少量生産メーカーとしては、若手だ。「1回のロットで、約20本を製作します。目標は、年産100本ですが、まだそのペース



オーナーの手に渡る日が近い、完成前の特注キューが置かれていた。I.L.Cと9Heartsの実物が見られるのも、工房を訪れる楽しみの1つ。

まで上がりません」と、浩之は控えめに話す。

金属加工の仕事をしてきた浩之が、キュー製作を手掛けるようになったのは、2010年。菱沼代表からの誘いで、I.L.Cの製作に携わった。「多くのカスタムキューメーカーに会いに行くためアメリカまで行き、全ての工程を見て回りました」(浩之)。

しかし、2011年夏、東日本大震災の影響により、仙台市から新潟市に家族全員での移住を決意する。「もし仙台にいたら、キューは作れませんでした。おそらくキューメーカー専門となる覚悟が、どこか足りなかったと思います」(浩之)。

とはいえ、新しい土地での工房立ち上げは苦勞の連続だったという。またこの時期、より多くのプレイヤーが手にできる価格の実現と、まとまった本



ベニヤを組み合わせた、バタフライ(タケノコハギ)が美しい、9Heartsのキャロムキュー。シャフトはキャロム仕様だ。

数のキューを提供できるよう、I.L.Cとは別ブランドの構想を練り始めた。

ブランド名は、6年前に菱沼代表の不思議な体験に由来する。それは2013年、アメリカのペンシルバニア州で年一度開催される『スーパード・ビリヤード・エキスポ』。菱沼代表が会場行きのシャトルバスを降りた際、足元に落ちていたのがトランプの「ハートの9」。カードを拾った瞬間、将来これをブランド名にしたい、と直感したという。このエピソードを聞いた家族全員が賛成しブランド名を「9Hearts」と決めたのだ。

新潟に移ってから4年。キュー製作は徐々に軌道に乗る。2016年には、菱沼代表が仙台で経営していたビリヤード場『パワーハウス』のスタートアップだった貴史が加わる。「ものづくりの経験はなく、ゼロからのスタート

でした」(貴史)。これでキュー製作のペースと品質は大幅にアップ。2017年夏、ついに9Hearts最初のシリーズがデビューしたのだ。

カーボンとは真逆の長熟シャフト

9Heartsは、キャロムキューから着想を得た、ジョイントから先角まで、一定間隔で太さが変わるテーパーを持つ、「長熟シャフト」1種類のみ。その

ため、どのモデルを選んでも、打感はい定の範囲に収まる。「長期熟成」略して「長熟」のネーミングは、「急がない」製法を採用しているからだ。「シャフトのメイプル材は、仕入れた木材の中から重いもの、すなわち密度が高いものを自分たちで選別しています」(浩之)。昔ながらの方法で乾燥させた角材のみを仕入れ、数年間天然乾燥させる。さらに3年以上かけて、少しずつ削っては寝かせる工程を繰り返し、や



作業台のノートブックPCに置かれているのは、菱沼代表がアメリカで拾った「ハートの9」の実物が置かれていた。



キューになる目を静かに待つ、世界各地から集められた様々な銘木のストック。複数の業者から調達している。

つと完成品となる貴重品だ。この「長熟シャフト」は、他メーカーのキューでも使えるよう、各種ジョイントに合わせた単品も注文可能。使い込むほど手に馴染み、手入れするほど木が締まる、いわゆる「シャフトを育てる」経験を味わえる。カーボンシャフトが普及する現代に、真逆の伝統的なアプローチで、プレイヤーが手放せなくなる、最上のシャフトが得られるのだ。

ウルトラを超えるモンスター

9Heartsのジョイントは、他メーカーにない特徴的を持つ。「モンスター」と名付けられた、接合面がすり鉢状のジョイントだ。フラットフェースや14山パイロッドという伝統的な形式と比べて、ジョイントの存在を感じないほどタイトにシャフトとバットを結合する。これはアメリカのキューメーカー、マイク・ランブロスが90年代半

▶9Heartsのシャフトは、密度の高いメイプル材だけを選び、長期間かけて作られている。現在は2012年に仕入れた材を使用中だ。



▲9Heartsの製作は、主に2人で分担しているが、菱沼代表が手伝うこともあるという。いわば3人の合作だ。



▲完成後は見ることができない結合部にネジ山を切って接着。タイトな打感と澄んだ打音を生み出す秘密の一つだ。



▲9Heartsのシャフトカラーは、互換性を考慮して標準デザイン推奨だが、特注でこのような別デザインも可能。

ばに開発した「ウルトラ」ジョイントを範としているが、より強固な構造を実現するため改良した別物だ。「歴史的にランブロスが数多く流通している中京の方々からも、一体感が全く違うと言われますね」(菱沼代表)。

パワーを生み出す技術力

これまで何度も渡米し、多くのキューメーカー工房を訪れ、作品に触れてきた2人。その経験から、材料同士を結合する部分の工作精度を上げることが、キューの「一体感」、言い換えれば撞いた際のエネルギーロスを減らすことにつながるかと考えている。エネルギーロスが少なければ、同じショットでもよく手球が走り、より軽く撞け、撞点をより中心に寄せて撞いても十分なヒネリをかけられる。プロや上級者の強力な武器となるのは勿論、パワーのあまりない女性プレイヤーや初級者も押し引きできる。加えて、木工品ゆえ腕や肘にくる負担が少ない。

筆者は約1ヶ月、9Heartsを借りる機会を得た。伝統的なカスタムと一緒と決めつけて撞いた当初は全く合わなかったが、数日間試すうち、素直で分かりやすい特性を持つていることに気が付いた。グリップに伝わる振動は心地よく、手球的に当たった後、押しつけるように前進してゆく現代的なアクションは、撞いていて心地良い。工作精度の高さが生み出す賜物だ。

「高精度な工作機械を使っていますが、それよりも作業する人間の技術向上の方が重要だと思います」(浩之)。

また、工作技術の向上は、個体差を

極力少なくして、同じ撞き味のキューを繰り返し製作可能とする。天然素材ゆえ個体差がある木材を、バット部分のコア材や、外周材の重さなどを計算して選ぶのも重要な技術だ。もちろんその過程で失敗はつきもの。「わざと失敗して、覚えることもありますね」(浩之)。「インレイ材の色を間違えて入れてしまい、翌日気づいて直したこともあります(笑)」(貴史)

独創的なデザイン

9Heartsのインレイやハギのデザインは、キュー尻の「バックファイア」キ



▲キュー製作に対する厳しい姿勢と、笑顔を抑えない明るさで、二人を励まし続ける菱沼代表(中央)。ILCの詳細は次号で。



ャップこそILCと共通だが、異なるテキストで独創的だ。ベニヤと銘木の色使いは、コントラストが強く、離れていても目立つのが特徴だ。インレイはシンプルな形状を、ILC譲りの繊細さで美しく仕上げている。「特定の誰かではなく、製作ロットごとにテーマをまず決め、会社全体でデザインしていきます」(浩之)。

ロットごとにテーマを変えているため、同じキューは原則再製作しない。あたくもファッションブランドが、季節ごとにデザインのトレンドを決めるかのようなものだ。そのため、完成品のデザインが気に入ったら、迷わず手に入れた方が良い。

もちろん9Heartsのテイストを損なわない範囲で、特注デザインも受けるが、「メールや電話ではなく、直接会って相談しながら決めたいですね。工房に来て、半完成品のバットや、銘木を手にとって選ぶ人もいましたよ」(浩之)。「オーダーは難しくないので、まずは気軽に聞いてください」(貴史)。納期は半年から1年程度との事だ。

なぜILC9Hearts

9Hearts+ILCのセカンドラインと位置付けているが、廉価版ではなく、浩之・貴史のコンビが自ら考え、工夫

を重ね、確固たるコンセプトに基づいて製作される別ブランドと考えた方が分かりやすい。もちろん、その背景には、菱沼代表の豊富な経験と知識、そして、キュー製作哲学がある。

ILC9Heartsの違いは、ファッションのオートクチュール(高級オーダー服)とプレタポルテ(高級既製服)のようなものだ。今後については、「これまででキューになかった色味のデザインを出していきたい」(浩之)。「自分のキュー製作経験はまだ浅いので、さらに上達したい」(貴史)と、前向きだ。また、スリークッション用のキューも手掛け、プロの試し撞きでは高評価を得ている。現在までに30本ほど製作したが、「9Heartsならではの独自性を打ち出しつつ、プレイヤーの意見も取り入れ、さらに改良していきたいです」(浩之)。

9Heartsは、また少量ではあるが、海外にも渡っている。今後、アジアや北米へ、情報も積極的に発信してゆくとのことだ。

デビュー後わずか3年で、これほど高い完成度のキューを作るメーカーを他に知らない。やがて世界中のコレクターも注目する、新元号にふさわしい、次世代のカスタムキューブランドとして期待しよう。

Traditional but in novative Hearts